

近代日本文学にあらわれた僧侶像（六）

見 理 文 周

十八

現代における僧侶の役割とは一体、何であろう。どうすることに、存在の意味や価値があるのか。いや、そもそも僧侶とは一体、何なのか。はたして僧侶は、現代の世に有用であり必要なものなのだろうか。それとも、もはや無用の存在であり、ただ形骸化した遺物にすぎないのだろうか——？

立原正秋の『きぬた』（昭47）を読んでいると、次第に、このような反仏教的で根本的な疑問に迫られてくる。

この作品は、その題名が示すように、能の八砧Ⅴ——五番立ての能の四番目で狂女物——を全体のテーマとしている。つまり、都へ上ったまま帰らぬ夫を待ちこがれて砧を打ち続ける妻の、哀切な姿である。能の八砧Ⅴは九州芦屋の領主とその妻を題材にし、待ちこがれてこの世を去

った妻の亡霊を、帰郷した夫が哀れんで読経し、恋慕のあまりの怨念をなだめて成仏させるといふ筋書である。これは、前漢の蘇武が胡国で捕虜となったとき、その妻が夫の身を思つて砧を打ち、その音が万里をへだてた夫の耳にまで聴こえたといふ古事に照応するのだが、この小説はその主調を、現代の寺を離れて行つた僧侶と、その寺に残されて夫を待ち続ける妻とに舞台設定している。その妻は、暗い本堂の如来の前にすわり、女の情念をこめて読経し、八一言芳談Ⅴにある「後世をねがはぶ、世路をいとむがごとし、けふすでに暮ぬ、渡世はげまざるにやすし」といふ言葉に感嘆しながら、砧ならぬ鼓を打つのである。彼女はこの举措を、かつて東京五流能を鑑賞した時の、「二調の舞台」から学んでいる。彼女は、「今年もやみやみ聞ぬ。一期いそがざるに過ぬ。よひにはふしてなげくべし、いたづらにくれぬることを。暁にはさめて思ふべし、ひめもす行ぜむ事を。懈怠の時には、生死無常を思へ。悪念思惟の時には、声をあげて念仏すべし」といふ八一言芳談Ⅴの文を、「夫にかまわれなくなった自分にあてはめて」いるのだ。

こうして、この小説は、この作者特有の一つの中世的女性像を彫琢した文章とも言えることができるが、彼女を取巻く人間関係の様相は、必ずしも静謐と諦観の世界にあるとは言えない。むしろ、マンションやクラブといった現代的風俗や、密会や情事という淫猥な俗情に彩られているのである。それは、部分的にはアンモラルな愛欲の人間模様であり、立原正秋という作家の考察に欠くことのできない、一つの条件である。が、同時にこの作家は、中世的な美の世界を志向していて、現代と中世、放埒と抑制、華麗と寂漠といった対立的なものの葛藤を描くことで、その中に生と美の調和を求めようとしている。このことが、その文章に張りりと精彩を与え、作品に深さと魅力をもたらす要因となっているのである。

ところで、『きぬた』の主人公と見られる女性は、縫といい、生家は小田原の自照寺である。十四年前の晩春、現在の臨済宗青松寺派の勤心寺に興入れて、長岡道舜の妻になった。寺は、三島駅の北口から黄瀬川沿いにタクシーで二十分ほどの距離にある。山門をくぐると本堂までは二千メートルの杉林が続き、そこを抜けた広場の向うの高みに、寺が建っている。しかし、自然に恵まれた寺での「季節の移ろいがひとつの歎びであった数年は瞬く間に過ぎて行」き、三十七歳となり、台元という中学二年生の息子、和枝という小学六年生の娘の母として、「気がついてみたら、夫は床離れして」妻のもとを離れてしまっていたのだ。「軀が火を噴くこともあ」り、「ていとうていとうと鼓を打ち、今日もすでに

暮れぬ、とおのれを無理に納得させてみたところで、火が収まるわけでもないのに。

縫の夫の道舜は、この妻と二人の子供、さらに父親の榮舜をも抛りっぱなしにして、東京四谷の片町に五年前にマンションを借り、そこを仕事部屋として小説を書き、女に没頭している。それは、「明晰な視界」の欠けた「怠惰な生活」で、彼は「朝帰りの感触のような作品ばかり」書いているのだ。情事の相手は、一人は平塚俊江という三十五歳の人妻で、十二歳年上の亭主は国立大学で理論物理を講じている。道舜とは一年前、銀座の白井という友人のカメラ店で知りあったが、二人の子持ちで、不妊手術を受けている。また、友子という三十をすぎたばかりの人妻は、男がわかって面白くて仕方ないという。亭主はパイロットで、月の半分はヨーロッパで過ごしている。彼女は、俊江と同様に昼の情事にふけり、幼稚園に預けた子供を連れて帰る。道舜には、この他にも、「通信社」というクラブの、名前は識らないが腰がくびれて軀のよく撓う女などがいるが、最も強く深く係っているのは、中川冴子という二十八歳の女である。座敷名を力弥という新橋の売れっ子芸者で、大蔵流の小舞の名手でもある。青磁に凝っているが、道舜は、この冴子の「あかい湯文字の下には無上の安堵があ」ると思っている。

かつては、道舜もやはり禅宗の寺の後継ぎとして、本山青松寺で何年かの僧堂生活を経験している。しかし彼は、一休宗純や石平正三や良寛などのように、「破壊の衝動のなかで調和を求め」ることはできなかった。その点、「彼はまったく普通の男」で、「取り去るべき角のない性

格」であった。また、まだ勸心寺にいた時分には、臨済宗という伝統——先人によって徹底的に点検されたその家風——の、「安住の世界」を生活の拠りどころとして生きていた。その拠りどころは、「足を踏みはずさないかぎり」「求めなくともすぐ目の前にあった」のだ。が、道舜はその安住の世界を飛びだし、「気づいたときには、臨済の家風は彼にとって過去のものになっていった」。「それは自ら意志した事ではなく、小説が売れだすと同時に自然にそうなっていったのだった。また、「妻の縫にも不満があるわけではなかった」のに、「日々に疎ましくなっていく僧侶の世界」とともに、妻からも遠ざかってしまったのである。「事実、縫の立場から見ても、道舜と彼が小説を書かねばならない不可分の関係といったものがなかった」のだ。

そんな道舜を、縫は「このひとには希望があるのだろうか」と思う。すると道舜は、『人間なんて、結局は、さまざまなげものにすぎない。闇だよ』と言う。縫は、寺と妻子を抛りっぱなしにして小説や他の女性に没頭しているからには、「嘘でもよいから、妻子の前で、自分の行為を真実らしく見せる措置を講じ」るべきではないか、と憶みに思う。そして、希望がないのなら『勸心寺にお帰りください』と言うのだが、道舜は『臨済宗に希望があればね』と答え、他の宗派だとして『いづこも同じだよ。……俺には、臨済にかぎらず、宗教は解らないよ。……』と言う。彼は、今没頭している小説や女にだって、希望や夢を持ったことがない、というのだ。

道舜にとって決定的なことは、勸心寺に常住したとしても、彼には宗

教経験がない、ということである。現在、どの宗派でも同じであるが、「僧侶の宗教的態度は世襲による日常生活の一部分にすぎない」。だから「宗教意識は皆無」である。これは極めて重大なことであって、およそ宗教的生活というものには、その契機となる動機——無常観の自覚とか罪の意識とか、自分の過去への反省とか抑圧者への畏敬とか——がなければならぬし、したがって懺悔とか発心発願とかいう信仰への過程が、伴わなければならないだろう。その点、世襲僧には「宗教的対象をいつもおのれより優位なかたちで意識し、またそれを畏怖する」ことが不可能なのだ。つまり、「世襲による僧侶の意識は、魚屋や八百屋の世襲と変りがない」のである。

長岡道舜の父親である栄舜は、禅僧として厳しく身を持してきた人ではない。勸心寺の透垣から斜面の石段をのぼった松林の先に、無量庵という庵を結んで一人で住んでいる。四年前、六十二歳で妻を亡くしたが、決して遁世したわけではない。かつて本山青松寺の管長を二期もつとめたが、誘いがあれば、また管長をやるうと思っている僧侶である。しかも、頼子という「かななぎのような表情の」四十五歳の女性に身の廻りの世話をさせ、日夜のごとく「暗く澱んだ肉欲」に溺れている。頼子は、裾野町にある同じ臨済宗の寺の奥さんで、夫は五年ほど前から中風で臥している。栄舜は週に一度ぐらいしか勸心寺に降りてこない。だから、朝夕の勤行は縫の日課となっている。

この栄舜と道舜との父子関係が、縫にはよく理解できないのだ。何か

わけがあると漠然とは感じていても、はっきりしたかたちが見えない。榮舜は、道舜のことを「小説家というのは一種の詐欺師だ、……あいつは言葉で読者を縄目にかけている」と言い、一方、道舜は榮舜のことを、「うちの親父には宗教がわかっていないんだ。あれはまったくの俗物だよ。あの人は、地獄をいつも気易く素通りしてきている。本山の管長を二期つとめてきているが、彼がやったのは仏教の解釈なんだな。註釈というやつだ。何冊か本をだしているが、なかにはなんにも書いていない」と評するのである。

この榮舜が、一月の死者が多く出る多忙なときに、胆嚢炎と腎臓炎で三島市内に入院する。縫が、本山から雲水を一人よばねばならぬので、打合せのために病院を訪れる。すると院長から、病人と頼子との情事のことと糾される。『腎臓病に悪影響をおよぼす行為を、殆どまいにち行っているらしい』というのだ。縫は、「勸心寺の乱れを見せつけられたような気がして」、「顔が上気」する。「舅の生臭さを病院に来てまで知らされた」のだ。「一方に禅僧の場があり、裏に他寺の梵妻との関わりがある」。なんとという人だと、縫は思うのだ。数日後に、雲水の都合がついたことを榮舜に報告に行くと、『三万円も月給を払えばいいかな』と言う。廉すぎないかと縫がただすと、『なに、雲水の身で三食つきだ。三万円でもいだろう』と、事務的に割りきれた考え方である。こんな人に入れ揚げている頼子の気持ちが不思議になるのである。

道舜が病院に顔を出す。『どうした風の吹きまわしだね』と、榮舜が言う。やはり、頼子が来ていて、道舜を見て「目を伏せ」、茶をおくと「ひ

っそりと病室から出て行く」。「ある時期以後、血のつながっている者同士の生臭さから脱けだして、父を客観的に眺められるようになっていく」道舜は、『わざわざに見舞いに来るほどの仲でもないでしょう』と答える。『なんだ、その言い草は』『用などありませんよ』『そうだろう。東京で女から女へ渡り歩いている男だからな』『あなたの息子ですからね』——こうしたやりとりの後で、道舜が言うのである。『……めったに会うおりもないので、ちょうどよい機会ですから、勸心寺のあとつぎについて、御意見でも伺っておきましようか』

この父子は「話しあいながらいちども目を合わさない」。そして、『平一郎をあとつぎにしたら如何ですか』と、道舜は言う。

勸心寺の寺男、「平六の息子の平一郎は榮舜がお幸にうませた子」である。お幸は、三島在の馬方の娘で、榮舜は彼の子を宿したお幸を、寺男の平六にあてがっている。道舜が勸心寺から離れていった原因は、そこにもあるのではないかと、と縫は母からきいており、父子の間に交流がないのはそのせいかと考える。しかし、それだけではないのである。平六とお幸夫婦の他の子供、沼津に嫁いでいる満寿子も御殿場でバーを経営する常子も、みな榮舜がお幸に生ませた子供なのだ。この平六は、かつて、刑務所にいたときに教誨師であった榮舜の言葉を信じ、この寺に引きとられている。現在、本堂の東側の離れに棲み、三反の畑で季節の野菜などを作り、寺から平六に二万五千円、妻のお幸に一万五千円の月給を貰っている。平一郎は三島駅前のレーヨン工場に勤めているが、ときには畑仕事の手伝いもする。榮舜も道舜もいなくなった勸心寺では、

縫は平六夫婦がいなければやって行けない。しかも平六は、『道舜さん、あの人を批判してはいけませんよ。私のほかにも、あの人に救われた者が何人かいるのです、勸心寺の住持として、それ相応のことはやってきた人です』と言っているのである。

『下男の伴の身で、さようなことが望めるはずもない。たわけたことを』と、榮舜が答える。彼は、道舜の子の台元を後継ぎにして、道舜を寺から放逐しようと考えているのだ。道舜は言う。『坊主なんてお経がよめればつとまるといふものです。げんに御自分の血をわけた男を下男の伴とはひどいことを。すこしやさしく考えてやれませんかね』

そして、平一郎の容貌のすべてが榮舜に似て生き写しだと指摘し、『世直しが出来るのは平一郎のような男ですよ。僕のような文明人にはとても無理な仕事でしてね。これは歴史が証明している』と言い残して、病院を立去るのである。『親不孝者めが!』という榮舜の罵倒を、背に浴びながら――。

長岡道舜には二人の学友がいる。一人は白井康といい、長岡らといっしょに国文学を専攻したが、家業のカメラ屋をついで、銀座六丁目に本店、都内に六カ所の支店をもっている。春画を蒐集してそれを観る道楽をもち、いわば趣味人として日常を送る銀座の旦那衆である。この男は、この作品で、道舜と縫と、もう一人の友人である塩津宗禪と妻の澄江、および前述した情事の相手の女たちの間にいて、狂言回しのような役目をしている。

塩津宗禪という男は、目黒の高台寺にいる有髪の僧侶で、ある私立大学で仏教絵画史を、また週に二日、京都の花山院大学で八禅関策進Vを講義している。生来やさしさの持主で、その「夫には欠けているやさしさ」に縋ることが、縫のなぐさめになっている。と同時に、「塩津のやさしさをいつかは受け容れるかもしれない自分が怖い」。一方、道舜も「塩津宗禪が縫に好意をよせていることは以前から知っていて」、「塩津と縫のあいだになにかが起ったとしても、それは当然のことだという気がし」ている。すでに数年も前から、道舜は宗教経験をしてきた宗禪に懸隔を感じていた。「その世界を羨望したことはなかった」けれども――。

かつて道舜は、公案禪について宗禪と言いあらそったことがあった。青松寺の僧堂生活の仕上げのころである。道舜は僧堂から裾野の勸心寺に帰ることで、「無為自然な状態への復帰」を考えていた。彼にとって公案禪は、すでに無意味なものとなり、「その有意性の検証可能性が見当らなかった」のだ。宗禪は、「反証の可能性を示せ」と道舜に迫り、道舜は、「公案は語を単位にしてそこに意味をあたえようとしている」と答えた。「それでは答えにならん」と宗禪は言ったが、道舜は、「語はたしかになんらかの意味をもっているだろうが、それは名詞であり助詞である、したがって語の単位から文の単位に移らないかぎり、感覚経験を捜し求めても、おそらくそこに真実はあり得ないだろう」と答えて、「宗教的立場で訣別した」のであった。

勸心寺に戻った道舜は、縫と結婚し、「社会的に無為であることを終

生の目標にしよう」と考えて、裾野を歩いた。「社会的に無為であることが禅僧としていちばん正しい在り方ではないか」と。

この作品には、道舜の友人ではないが知己として、もう二人の僧侶が登場する。一人は福井浄海という三十歳すぎの男で、本山青松寺僧堂の典座職である。彼は、墨染の痩せぎすの背中をして、河原町四条のビーフステーキの店に京女というところを、冴子と一緒に道舜に見られるのである。道舜は、「二人は出来ているな」と思い、相手が気づいて話しかけてきた時に、はじめて気づいたような振りをして返事する。冴子が、『墨染の衣で、こんなお店にビフテキを食べにくるのね』と訊くと、『嗤っちゃいかんよ。京都の裏側はみんなあんなものだ』と答える。そして、『つれの女のひとはなにかしら。いい着物をきていたけど』という冴子に語る。『商家の未亡人というところだろう。それとも茶の師匠か。雲水と茶の師匠が結ばれる例は多いんだ。そういうえば、今日は、青松寺の初釜の日だったな』あなたの小説の材料になりそうじゃないの』いや、よそう。あの坊主と女のことを探ったってはいまらん。茶や花道の世界は、裏に入ってみると、男女関係については実に淫靡でね——こんな会話の中に、福井浄海は現代風俗の一つの点景人物として描かれているが、しかし、この作品の筋の運びには関係がない。

もう一人の僧侶は桜井良鏡といい、生家は神奈川県秦野の寿光寺、前年春に花山院大学を卒業して現在は本山青松寺の雲水である。縫が勧心寺の用僧として頼んだら、やってきたのがこの青年僧で、彼は高校生の頃に半月ほど勧心寺に泊って、道舜から受験勉強を手伝ってもらったこ

とがあり、道舜も、かつて良鏡の父の禅定から茶と挿花を学んだ、という関係である。良鏡は、縫に『先生はなぜ寺から出て行かれたのですか？』と訊くが、『あのひと、お経をよむのがいやになってきたのですよ。くだらない小説など書いていたら、そうなりますよ。……』と答え、それより、そろそろお嫁さんを迎えたら、などと縫は話している。……その後、良鏡は小田原の清月寺の娘と結婚するという話が進んでゆくことになる。

以上、この作品に登場する人物を、全部拾い上げてみた。しかし、この人たちの間に展開する物語りといったものは、意外と少く、事件の起伏といったものも、あまり大きくない。つまり、この作品は、外面的な筋書の進行や発展を描こうとしたものではなくて、内面的に、登場人物の相互関係の状態を主として描こうとしたもののように思われる。

あえて事件らしきところを指摘すれば、縫が勧心寺の法務を塩津宗禅に頼んだ夜、一度だけ自分から身を投げだすことと、そのことを夫から聞いた宗禅の妻の澄江が、道舜のマンションを訪れて縫と同じような態度に出るところであろうか。もちろん、そうした事件の経過については、四人の男女の心理的・生理的な相関係が、瑞々しく情感のこもった文章で描写・説明されている。そして、実はそこところが、立原正秋という作家と『きぬた』という作品の個性的な特色であるわけであるが、作品の中の八僧侶像を探索うとしている筆者としては、それを的確に掘みきれないもどかしさと不満が感じられるのである。

外面的にだけみれば、この作品に登場する僧侶は、いずれも俗物であり、愚劣であり、宗教家としての直摯さや敬虔さや熱情に欠けている。

すなわち、長岡道舜の日常は、人妻との事務的な情事や冴子（力弥）との「赤い湯文学を割る」行為の繰返しだけで、そこには、彼がしばしば口にしているように、全く「希望がない」。また、父親の榮舜は、これこそ、いわゆる宗政家といわれる僧侶の多くがそうであるように、典型的な俗物僧だ。彼のような破廉恥漢は、通常の社会でなら立場の失脚に価する不道德な存在である筈なのに、奇妙にも僧侶であることによって秘匿されたり、黙認されているという実態は、よく耳にするところである。その意味では、「表面がきれいなだけに、裏が目だつ」「淫靡な男女関係」の例として、一つの批判材料となっている。

さらに、塩津宗禅という学者僧も、「生来やさしい」というだけで、どうにも仕様のない存在である。縫が、「中川冴子と情をわかちあっている」夫が「わたしからすべての希望を失わせてしまったいま、わたしに出来るのは、この残酷な行為だけ」と考えて宗禅に身を委ねた翌朝、宗禅は京都に講義に行く前後の一日を都合できないかと、縫に昨夜の関係の続行を誘いかけ、『なんの事でございましょう？』と身をかわされている。そして、『京都で長岡にあったとき、彼は芸者をつれていたなあ。きれいな人でした』と、捨台詞を吐くのである。いつか道舜が宗禅のことを、「地獄に気づいたのはあいつの方が早かったな、……塩津は地獄のなかに入りながら地獄を自分のなかに入りこませない男だ」と縫に話したことがあったが、仏教の、とくに禅を教えながら禅に生きてい

ない、実践哲学を説きながらそれを行っていない学者僧の、矛盾や出鱈目や形骸化が露呈しているのである。おそらく、この宗禅も世襲僧侶なのであろう。そして青年僧の桜井良鏡も、寺の後継ぎということに根本的な問題意識を抱くことなく、いずれは塩津宗禅の轍や長岡榮舜の轍を踏むことになるのだらう。そのことがこの作品に書いてあるわけではないが、読んでみると自らそうした想像が、文章の背後に読みとられてくるのである。まさしく、そこには「希望がない」。

そこで、「希望のない」長岡道舜の考え方、生き方がはたしてどこに根ざしているのか、とくに、寺を飛びだして小説を書くという行為の底に何がひそんでいるのか、さらには、そうした道舜の考えや行為を通して、現代における僧侶の在り方や存在の意義を探りあてることが出来るのか、――逆に言えば、この作品はそうした作者の意図によって書かれたものなのか、どうか――を、道舜の言動から拾い上げて洞察してみた。

長岡道舜は、臨済宗というひとつの伝統の、「安住の世界」から飛びでて、小説と女に没頭している。しかし、「彼は女に希望を持ったこと」も「夢を抱いたこともなかった」のである。彼の女への関わりかたは、「冬の時は冬ばかり」であり、「冬のなかに春のあわれを見るのではなく、冬には冬のあわれをしか見ない」のである。道舜の裡には「無為が重い霧のように横たわっている」。たまに勸心寺に帰ってくる彼を見て、『あなたには、希望があるのでしょうか』と縫が問うと、『ああ、そう

いえば、どこに行っても本当に希望はないな』と答える。縫には、いつもまともな返事とか答えは返ってこないのだが、その「見当ちがいな返事には、変に実感がこもっている」のだ。そして道舜は、縫の気持とはかわりなく、いつの間にか寺から姿を消してしまふ。

道舜は、「生きるということは矛盾そのものだ」と考える。そして、『俺には、臨済にかぎらず、宗教は解らないよ』と言う。「宗教に光を求め、そこをさぐりあてた人々は、現世で光の欠如に出あった人達ではなかったのか。こうした人達は、もう現世には戻ってこれないし、現世では出逢うことのなかった光を求めて行くことを促されているだけ」なのだ。しかし、道舜は「その世界を羨望したことはない」。

河原町四条のビーステーキの店で、青松寺僧堂の典座の福井浄海が女連れでいるのを見た後で、道舜は思う。「京都とのあいだに距離が出来すぎている」と。京都のすべての「寺院のただずまいが鼻についてき」仕方ない。「禅寺の閑寂な深みのない」、「仏法を売りものにしていく寺院」に、「生理的な嫌悪感」がある。禅寺から「佗びた暗示の場」が喪われ、「竜安寺の庭のように暗示を売りものにして金を得る有の世に走り」、「心から唯物的なものに移行」している。名園とされる東福寺方丈の庭などは、「実に生臭い」もので、それを売りものになっている寺が、「なんとも不愉快な存在」に思われるのだ。『臨済宗というのとはともが生臭いんだ。それがいやで寺を出てきた』と、前に道舜は冴子に話している。

道舜にとって、臨済宗は本当に過去のものとなってしまったのだろう

か。青松寺を見たいという冴子に、彼は言う。『臨済の寺に生まれ、僧侶になったのは余儀無いことだったのだ。いまはそこから出てしまっている。それを眺めてどうするというのだね』。「かなり自覚的に」宗門と離別した道舜は、その家風に無関心であり、塔頭の僧侶と顔があっても、いまは「別の世界の人達」だった。「彼の知るかぎり、現代の名僧といわれている僧侶達は、現実に関心がありすぎた」。しかし、「彼等が現実を救うなどとはまやかしにすぎなかった」。道舜は、「勤心寺から心が離れたとき、自分が到達点のない道を歩みだしたのを知った」のであった。

冴子が、『あなたのお話には、なにか希望がない、といえはよいかしら、そんな気がしたのですよ』と、いつか縫が言ったのと同じことを言う。すると道舜は、『それはたぶん、この現世に願う心もなければ、といって日常を厭う気持もないからだろう。一日先の移ろいはわからないが、目の前の移ろいは見えるんだな。一大事とは今日ただいまのことを言うのですね、先のことではない』と言い、芭蕉の「この秋は何で年よる雲に鳥」の話をする。「到達点のない道を歩みだした」道舜であってみれば、この秋はどのようにして自分の身に年を加えるのかと、空飛ぶ雲と鳥に旅人としての自分を映す、これ以外に見えるものはない。だから、『現実の一大事に比べると、人間の記憶など、さしたるものではないんだな。歴史などというものは曖昧なものでね、すっかり身も心も脱ぎ捨ててしまえば、目前に見えるのはあかい湯文字ばかり、ということになっていく』。道舜は、「結局、あのあかい湯文字も、辿りつくところは生命とい

うことだろう、すべてを放下してはじめていのちが見える、というのもおかしな話だ、……」と思う。

長岡道舜は、禅寺の庭も公案禅も、所詮は禅僧の意識の弄びにすぎない、と考えている。そして、「社会的に無為であることが禅僧としていちばん正しい在り方」だという自信のもとに、「到達点のない道」を歩みだしている。そのことは、「本山青松寺における父栄舜の立場をわろくし、同時にその一派の俗物主義を批判することになった」。

栄舜は、白隠が開創した青松寺派第一寺としての勸心寺を、潰す気かと詰問した。そして三年の考える時間を与えたが、その時すでに道舜は小説を書きだしていた。なぜ小説を書きだしたのか、といっても、道舜には「彼が小説を書かねばならない下可分の関係はなかった」。「強いていえば、仏教は、先人の点検のあとを歩きながら、その記録や資料をもとにして伝記研究をしているにすぎなかった。そこにはもはや普遍もなければ個別もなかった」。

宗門も仏教も、ただ先人の点検のあとから、その記録の整理をしているにすぎない——という見識は正しいだろうか。これは重要な指摘である。おそらく、この回答の是非が、仏教者と文学者との立場の岐路になるだろうと思われるほど、微妙な指摘である。仏教は伝統の墨守のみに傾いて、新しい価値の創造を無視しがちである。全体の調和のみを配慮するあまり、個性の発現を阻害しがちである。一切衆生悉有仏性ではあるが、世界は存在するものの集合だけではなく、生起することの堆積

があつてこそ、絶えず新しい、生きた価値創造の場となるはずだからだ。

道舜は、「小説家という特権を使って」青松寺内部の出来事を批判した、という。塩津宗禅が、そのことを縫に話す。『彼は、宗教は解らなくとも、宗教的な人間だと思えます。今日、宗教の権威といっても、それはかなり人為的につくられるのですが、しかし、それは本山と末寺がある以上仕方ない事です。……宗教では伝統や制度を無視できないのに、彼は、宗教的権威の源泉は伝統や制度ではなく僧侶の人格にある、と批判したわけです。僧侶の人格といっても、彼はカリスマ的資質を持った者を否定して、……つまり上層部の人達を罵倒したわけです。罵倒された人のなかには彼の父もふくまれていたのです』

当の栄舜は、道舜が病院に顔を見せると、『おまえ、病人のいのちを縮めにしたのか。昔のことを掘りかえすのは三文文士の悪趣味というものだ。……わしの過去をほじくりかえすのは、この辺でやめてくれ』といひ、彼がお幸に生ませた平一郎を勸心寺の後取りにと提案する道舜の言葉をしりぞけるが、そこで道舜が言うのである。『坊頭なんてお経がよめればつとまるといふものです。……』

こういふところを読むと、この論述の冒章に記したような疑問が湧いてくるのである。現代における僧侶の役割とは一体、何か。どうすること、に、存在の意味や価値があるのか。そもそも僧侶とは一体、何なのか——？

ちなみに、今ここで曹洞宗の宗門で示している「お寺のはたらき」

——お寺はなにをすべきか——によれば、① 修行道場としての役目、② 教化の道場としての役目、③ 礼仏道場としての役目、④ 葬祭道場としての役目、⑤ 家族の道場としての役目、が挙げられている。ということは、僧侶の役割も、この①から⑤までの道場に従事するということになるのだろうか。さらに、「仏教は世の中の人々を迷いから解放することを眼目とし」「お寺は、仏教のおしえを世の中に弘め、後世に伝えていくための施設」だとされているが、こうした立場からするならば、『きぬた』に登場する僧侶や寺院はいずれも不適格で、見当違いなことをしているように思われるのだ。現在、禅宗系だけをみても、曹洞は一万四千二百七十九、臨済は五千八百七十六、黄檗は四百七十四の寺院があり、それぞれに、それを上廻る僧侶がいる。(文化庁『宗教年鑑』の資料) しかも、その大半が兼業である。いわゆる半俗半僧である。しかも、大方の社会通念では、「僧侶の本分は死者饒礼」と考えられているから、教師を兼ねた兼業僧などはむしろ有能な僧侶、という評価を受けているかもしれない。道舜は、すでに大学生のときに、父の榮舜が納骨堂でお幸といるところを目撃し、「カリスマ的僧侶の卑猥さ」を知っている。そして、お寺の存在が「住民にとって切実な存在かどうか」を考えて、「なにもかもういやになって」勸心寺から離れて行ったのである。繰返し述べられているように、道舜が『小説を書かねばならない理由はない。必然性がない』。しかし、彼が寺に留まらなければならない必然性も、理由も、同様にないのではないだろうか。道舜は、「小説の有効性」を信じているわけではない。現代は「小説の書きにくい時代」でも

あった。しかし、それでもまだしも、荒廃した「小説の世界」の方が、仏教の世界よりはましだ、と道舜は言いたげである。

縫は、道舜がいつか「裾野の自然に還る」ことを念じている。そして、彼自身、「縫が望むように勸心寺に還るのは簡単だ」と思っているが、しかし、道舜としては「僧侶は廃業した」のだ。とうの昔、お幸に満ちた子を生ませたときから、榮舜は、寺男の平助にさえ心の中で「殺されて死んでいる」。そんな榮舜のいる寺に還れるだろうか。『もう一期管長をつとめんかと言ってきた。……そこでだ、わしが管長として本山に行っているあいだ、おまえ、勸心寺にとどまっていてくれないかの』という榮舜。『どうにも成仏できない人らしい』と道舜は言う。そんな榮舜のいる寺に還れるだろうか。

しかし一方、道舜は小説を書くことにも限界を意識し、希望を失っている。妻子を抛りだしたことについて彼は、『小説を書きだしたのがいけない。……』『考えてみてくれ。いまは印刷文化の氾濫時代だ。書けば活字になり、それが金になる。中間小説雑誌を開いてみるがよい。ろくでもない小説がずらりと並んでいる。末世だよ。気がついてみたら俺もそのなかにいたというわけさ』と、縫に話している。

また、別のところで、塩津宗禅の妻澄江との会話の中でも、『……現在の僕のこの虚名は、出版ジャーナリズムがつくりあげたものです。当世では小説家も彼等の本をだす出版社も、みんなが政治的になってきている。つまり、世のながが平和だという証拠です』と話している。

また、友人の白井との会話の中でも、『ろくでもない小説が売れても、やがて売れなくなるときがくるといふものだ』といい、売れなくなった小説家は、貯金でゴルフ場やマンションを経営をしているから、『つまり、実業家だよ。元小説家というところだろうね』などと話している。

この作品の最後、等第四章では、道舜は勸心寺に還って裾野の愛鷹山のふもとを歩く。そんな道舜に、縫が訊く。『……ここにお帰りになるものと信じてよいでしょうか。それとも、いまのあなたは、かりの姿をしているのでしょうか』。それに対して道舜は、『なに、生きているものはすべてかりの姿だ。生あれば滅があるというのは、生しょうなく滅なし、ということだろうね』と、例によって、はぐらかしたような答えをする。縫は、『なにか引導をわたしているようにきこえてくるわ。……あなたは、本当は、女を愛せないひと难道でしょうか』と言う。

勸心寺に還った道舜のところに、頻繁に編集者が訪ねてきて、泊った酒を飲んだりする。道舜は、すでに文芸家協会からぬけており、編集者が『長岡さんが東京をひきあげたのは、小説家を廃業してもとの坊さんにかえるつもりでいるからだ、とまことしやかな噂がながれていますね』と訊くと、『そういうことにしておいてくれ』と答えている。二人の子ども、「すっかりその気になっていたが、縫は夫を信じていない」。

編集者が、『そのうちこんなのを書いてくれませんかね。つまり出家の身で生臭い小説を書きだしたでしょう。そして東京での生活があった。そして再び寺に戻ってきた。その出家遁世の話を書いてくださいよ。遁世者の目、とかいった題で面白いエッセイが出来ると思いますかね』と言

い、道舜が『冗談じゃない。俺は出家落しゅつらくしたままだよ、いまだに』と答えていたが、縫の目に映る「夫は白い上布の裾を上から下げ、毛氈の胡座で、両腕の袖も肩までたくしあげていた。それは僧侶でもなければ小説家でもなかった」のだ。道舜はいつも彼の父親を悲惨な人だと評しているが、「悲惨なのはこのひとではないのか」と、縫は思う。

その後も、道舜は勸心寺にいて、毎日裾野を歩いている。そして九月、道舜は珍しく何年ぶりかで、縫と一緒に蕨狩りに連れていくという。至福の思いで、にぎりめしやお茶を準備し、着物をきなれている軀をスラックスとスエーターに包む。落葉松、山毛櫨ぶな、櫨、櫨の茂る原生林の中を歩きまわり、「小田原の能の宗家での彼との避けられない出逢いがおもいかえされる」。「夫にかまわれなくなつてから、どれほどのつらい思いがあった」ことか。「しかしそれは限りなく懐かしい顔」であった。縫は「夫を迎えいれ」、「全官能を垣間み」、「原生林のなかでこのまま朽ち果ててもかまわない」と思う。

また十月のなかば、道舜は一ヵ月ぶりで中川冴子（力弥）を訪れ、軽い痴話喧嘩のようなことをやり、翌日は神田の八旅の友社Vに行く。道舜は、すでにこの藤田という編集長にヨーロッパ行きの手続きを依頼してある。長期滞在の予定で、日本銀行に一万ドル持出しの申請をしなければならぬ。出発予定は、十一月五日。モスクワ経由の朝の便である。

しかし、道舜はこのことを、藤田以外には誰にも秘密で決行しようとしているのだ。『各出版社や家旅の方達にも知らせずに出かけるのには、

なにか理由があるのですかね。たとえば女から逃げるとか」と編集長が笑いながら訊くと、『ま、そんなところだろうね』と答えている。それから片町のマンションに行き、管理人から敷金を受けとり、途中で頼んだ古道具屋に「本と洋服だけのこして」家具を処分させる。塩津宗禅の妻の澄江からきていた手紙は、そのまま送り返す。

そして十月の十八日、道舜は査証等の申請をすまし、夕方、畑にいた平六と話をする。『爺さん、ちょっと外国を散歩してくるよ。……ひっそりと出かけることにした。縫にも出版社の人達にも話してない』

『まあ、お気のすむようになさい。お帰りを待っていますから』と平六は言い、『……なにもかも未解決のままにして外国に出かけるが……』と言う道舜に、『勸心寺は渝りませんよ、いつまでも、お元気で行ってらっしゃい』と答える。このとき道舜は、平六の広い背中に「紛れもない父の像」を、「ながい生涯を歩いてきた一人の男の歴史」を視る。

道舜が、「ヨーロッパをまわってこようか」と考えたのは、もうずっと以前のことなのだ。彼は、小説の書きにくい現代に、「いつまでも身すぎ世すぎの作品ばかり書いてるわけにも行かず」、「どこかで区切りをつけねばならない」と思っていた。彼によれば、「荒廃しているのは彼が生まれ育ってきた仏教の世界だけではなく、小説の世界も同じだった」のである。

十一月の半ばすぎ、縫は「夫が外国に行ってしまった」ことを知る。段ボールの荷物が届き、管理人への電話でマンションの契約解消を知り、

牙子を訪れて十月に別れたきりだと知る。「牙子でもない自分でもないどこかにあのひとの行くべき場所があったのか」、「思いめぐらしてみ」ても、「見当もつかない」ことだった。勸心寺の道舜の書斎は、「文机のそばに辞書が数冊、机の上には結城の敷物、その上に原稿用紙、その上に読みかけの八俊成卿女家集Ⅴがひらいてあつて、十一月三日に出て行ったときのままである。

ふと思いついた八旅の友社Ⅴの藤田に電話して、縫は夫がヨーロッパに行ったことを知ったのである。しかし、その行先はわからない。

歳末の二十七日、栄舜が胆嚢炎と腎臓炎で、また入院する。頼子も疲労で寝こんだので、派出看護婦をたのみ、寿光寺の桜井良鏡にも手伝いにきてもらう。良鏡は、来春結婚するという。栄舜は、いつか道舜が『あの僧正は近いうちに死ぬかもわからん。そんな予感がする』と平六に話したように、勸心寺としてはあまりあてにならない存在になっている。縫は、病院に行ったり、煤払いをしたり、餅を搗いたり、花を投げこんだりして、忙がしく大晦日を迎える。

後世^{ごせ}をねがはゞ、世路をいとなむがごとし。けふすでに暮ぬ。渡世^{ふせ}はげまざるにやすし。今年もやみ／＼^{なだ}閑ぬ。一期^{いちご}いそがざるに過ぬ。よひにはふしてなげくべし、いたづらにくれぬることを。暁にはさめて思ふべし、ひめもす行ぜむ事を。懈怠^{しやうじ}の時には、生死無常を思へ。悪念^{しゆん}思惟^{しゆい}の時には、声をあげて念仏すべし。

この八一言芳談Ⅴの一文を自分にあてはめての、縫という女性の念仏と精進の生活は、謡曲八砧Ⅴのテーマを奏でながら、やがてこの作品の

終結に向かう。彼女は、除夜の鐘が始まる前の本堂で、経を読んでいる「紛れもない夫の声」をきく。香煙の漂う須弥壇の前で、朗々と般若心経をあげているのは、声も横顔も夫にそっくりな「息子の台元」であった。それから縫は、鐘楼に登り、間合をはかって除夜の鐘を撞く。今ごろは多分、スペインかギリシャだろうという夫の耳に、はたして勤心寺の鐘の音は届くだろうか。しかし、「わたしが撞けば届くはずだ」と、二つ目、三つ目と撞いていく……。

この『きぬた』という作品は、このようにして終る。しかし、この作品の終結に関する作者の意図は、寺男の平六の言葉に籠められ、暗示されている。大晦日の山門を清めていた平六に、縫が『爺さんは、知っていたのでしょうか、道舜が外国に出かけるのを……』と訊いたとき、平六は知っていたと首肯き、『道舜さんは、勤心寺に戻ってきますよ』『……言葉にはしません。しかし、必ずここに戻ってくるお方です』と答えている。そして、『道舜はこれから小説を書いてゆくでしょうか』と縫が訊いたのに対して、次のように答えるのである。

『……人間というのは不思議なもので、自分達のやっていることが、ひとつのちからとなって高められてくると、前後が見えなくなり、わけもなくその坩堝のなかに入りこんでしまうものです。そんなときに、これは危い、と感じる人はごくまれです。それがわかる人は、やがて、人間のまいにちのごく平凡な生活に目を戻し、あの坩堝は危かった、と歩いてきた道をふりかえるものです。道舜さんははじめからそんな人でした。道舜さんがこれから小説を書くのが書くまいが、それはたいしたこ

とではありませんよ。……』

だから、縫が「もし平六の言葉を信じるとすれば、夫は勤心寺に戻ってくるはずだった。平六の言葉を信ずるしかなかった」のである。

緊密で雄渾といわれる作者、立原正秋の文体は、僧院の中に華麗な中世的女性像を描いて、一種の香気にみちた文学空間を構築している。また、『さまざまの頹廃を描きながら頹廃に溺れず、むしろ凍てついた冬の風景を木枯らしが吹き抜けて行くような爽やかな読後感』（入江隆則・文春文庫『きぬた』解説）という批評にも、ある程度、同感できる。

しかし、入江氏がこの『きぬた』の解説を、同じ立原作品の『冬のかたみに』の紹介や読後感と一緒にしたに行っていることには、同意できない。この二作品は、同じ作者が僧侶を描いたものでありながら、その意図とテーマはかなり違っているからだ。『冬のかたみに』には、一人の僧侶の厳しい人間形成の試練の記録として、爽やかな読後感があった。しかし、『きぬた』の読後感を、「凍てついた冬の景色を木枯らしが吹き抜けて行くような爽やかな」というのは、どうだろうか。血腥い僧院のしがらみに縛られ、そこを逃がれようとして、肉欲に耽溺する男の葛藤が、どうして爽やかなのだろうか。とくに、長岡道舜の仏教と文学に対する対決と選択の姿勢が、最後まで曖昧で「明晰な視界」に欠けている点、すこぶる心もとない。小説の世界では、仏教を優位に立てることも反対に小説を優位に立てることも可能な筈である。しかし、この作品の主人公に縫を設定したことによって△砧△のテーマは貫かれたが、道舜

の女との生活が主調になって話が展開したために、かえって道舜の命題が不鮮明になってしまったのかもしれない。もちろん、この作者の好みからいえば、縫だけでなく冴子も澄江も、俊江や友子などの人妻をもふくめて、女性の性^{さが}と生き方を描くことが、一つのねらいでもあったのだろう。それは理解できる。が、しかし、作品に八僧侶像Vを探ろうとする筆者の立場からすれば、道舜の姿勢には、まだ「純正を尊重する男の典型」(文芸春秋社本の帯紹介文)としては、物足りないものがあるのである。

道舜のヨーロッパ行きは、現状解決の手段ではなくて、現状からの逃避であるから、結局は八文学か仏教かVの対決の回答にはなりえなかったわけで、しかし、そこまで要望することは、もはや文学作品の鑑賞と研究の枠をはずれた、異次元のことになるので、筆を擱くほかはないだろう。

(未完)

※使用作品と引用文は、文芸春秋社(昭和48年3月)版の『きぬた』に拠った。